

鶴山書院報

第5号
 公益財団法人
 孔子の里
 〒846-0031
 佐賀県多久市多久町
 1843番地3 東原庫内
 TEL 0952-75-5112
 FAX 0952-75-5320
 E-mail ko-si@po.taku.nc.jp
 URL http://www.ko-sinosato.com
 発行人
 理事長 横尾 俊彦

改めて「忠恕」の精神

「天皇陛下・皇太子殿下が誕生日会見で

お話された、お好きな論語の言葉」



公益財団法人孔子の里
理事長(多久市長) 横尾 俊彦

今年五月一日に元号が新しくなります。

天皇皇后両陛下のご退位を受けて、皇太子殿下妃殿下が新たに天皇皇后に即位され、内外に向けての公式行事が行われます。

改元の特別な機会に、論語・孔子と天皇陛下、皇太子殿下の御縁について紹介させて頂きます。昭和五十八年(一九八三)年の天皇陛下の「五十歳の誕生日会見」のお言葉です。

「好きな言葉に『忠恕』があります。論語の一節に『夫子の道は忠恕のみ』とあります。自己の良心に忠実で、人の心を自分のことのように思いやる精神です。この精神は一人一人にとって非常に大切であり、さらに日本国にとっても忠恕の生き方が大切ではないかと感じています」と述べられました。

そして皇太子殿下も平成二十二(二〇一〇)年の誕生日会見で次のようにお話されました。

「(ご質問冒頭にあった)『天命を知る』という孔子の言葉は、自分がこの世に生まれた使命を知るという意味ですが、単に知るだけではなく、この世のために生かす、つまり、人のために尽くすという意味を含んでいるように思います。孔子の

言葉といえますと、確か天皇陛下が五十歳になられた時の会見で、『夫子の道は忠恕のみ』との孔子の言葉で質問に答えていらつしやいます。『忠恕』とは、自分自身の誠実さとそこから来る他人への思いやりのことであり、この精神は一人一人はもとより、日本国にとっても『忠恕』の生き方が非常に大切なのではないかとおっしゃっております。『忠恕』と『天命を知る』という教えに基づいて、他人への思いやりの心を持ちながら、世の中のため、あるいは人のために私としてできることをやっていきたいと改めて思っております。

皇太子殿下がご自身の誕生日会見で、このように今上陛下の言葉を引用されたことは、新たに始まる新しい御世でも、この「忠恕の精神」は引き継がれる大切な精神だと確信しています。

この「忠恕」は実は孔子直系第七十七代子孫の孔徳懋先生、直系第七十九代子孫の孔垂長先生が、とても大切にされ、世界人類を平和に導きたいと祈る思いで語っておられます。まさしく、「己の欲せざるところ、人に施すことなかれ」の教えです。

この機会に「忠恕」を胸に刻み、未来に向け、お互いが責任世代の一人である自分の使命を果たせるようにありたいものです。



第2回 多久百景写真コンテスト入賞作品

グランプリ



春季釈菜揚琴の調べ

準グランプリ



多久展望

「多久出身の藩医・西岡春益と佐賀の漢学者集団(一)」

佐賀大学 准教授 中尾友香梨

約十年前に佐賀に来てから、この地の豊かな歴史文化にすっかり魅了され、今や歴史に埋もれた佐賀「賢」人を掘り起こすことに情熱を傾けている。

多久は多くの賢人を輩出した。しかし中には、歴史に埋もれたまま、今日においてはほとんど名も知られていない人物もいる。その一人が西岡春益である。

筆者がこの名前を初めて知ったのは、一通の文書による。その文書は、佐賀の名物、野中烏犀圓の製造と専売に関する許可書であるが、末尾に

寛政八年辰

三月 上村春庵(印)

久保三桂(印)

西岡春益(印)

とあり、署名の三人は当時の佐賀藩の施薬方(藩医)である。野中烏犀圓は、藩医たちの吟味と調合の下に誕生したのである。

三人のうち、上村春庵については、『上村病院二五〇年史』(医療法人春陽会うえむら病院、二〇一五年)等に少し記述が見えるものの、ほかの二名についてはほとんどわからない。そこでまず西岡春益について調べてみることにした。

ちなみに『佐賀医人伝』(佐賀新聞社、二〇一七年)には、青木歳幸氏の執筆による「西岡春益」の項が

立てられているが、生卒年が「文化十四年(一八一八)??」となっているので、明らかに野中烏犀圓の誕生に携わった本人ではなく、同名を名乗った子孫である。

一 父・長圓

佐賀藩士の名簿にあたる「着到帳」に、西岡春益の名が登場するのは宝暦頃からであり、同十年(一七六〇)の「分限着到部類」に、「切米百三拾石中野数馬組 西岡長圓跡/悴春益」とある。春益の父は長圓であり、春益はこの年に佐賀藩士になったと考えられる。

長圓については、多くの記録が残っていないが、まず元文五年(一七四〇)九月に、村田元順・迎順的・水野及庵・花房宗純とともに、『普救類方選』を編纂・刊行している。『普救類方選』とは、幕府八代將軍吉宗が享保十四年(一七二九)に幕府医師らに命じて編纂・刊行させた庶民向けの医薬書『普救類方』をもとに、佐賀藩五代藩主宗茂(元文三年に隠居)が藩医らに命じて、領内の庶民でも簡単に入手できる薬草や薬種を用いた治療法を抜粋・編纂させたものである。『上村病院二五〇年史』に全文の翻刻が載っている。

ほかに、寛延元年(一七四八)閏十月に六代藩主

宗教が参府の道中、風邪を引いた際、長圓が村田元順とともに治療にあたったことや、宝暦四年(一七五四)には老侯宗茂の診察を行ったこと、また宝暦八年(一七五八)には小城藩六代藩主の長男直嵩の眼病治療に派遣されたことなどが、歴代藩主の年譜や『小城藩日記』等に見える。

二 藩医として活躍した春益

長圓の跡を継ぎ藩医として活躍した春益については、藩主年譜等に比較的多くの記事が確認できる。代表的なものを二、三挙げれば、まず安永四年(一七七五)十二月に、佐賀藩は国産薬種を仕立てるため、領中の荒田畑と野方の宜しき場所に、薬種を一通り栽培するように、藩医の西岡春益と江上友益に命じており、同九年八月には、同二名に領内を巡回して薬種の取れる地域の人々に薬種採取について教えるように命じている。

そして十年後の天明五年(一七八五)九月、同町人は郷医の養成に力を入れ、自宅でも式日を立てて郷医を集めて講義を行い、特に近年は伝染病が流行する中、折々領内を回って私費で施薬・粥米料をも負担しているということで、医道抜群の者として御匙格に召され、切米等を与えられた。

三 生卒年、別号、出身地

森錦洲著『肥前国誌』(青潮社、一九七二年)は、「佐賀ノ先哲」の項目に「西岡栢廬、名春益、別号拙翁、博学侍医、文化十年二月没、年七十九歳」と記しており、何にもとづいたかはわからないが、逆算すれば春益の生年は享保二十年(一七三五)ということ

になる。

また、八代藩主治茂の『泰国院様御年譜地取』文化元年七月二十四日条には、「右御痛所二付而御療養方申談、福地意庵・津田松園・久保魯庵・西岡栢庵（長垣親隠居）被仰付之」とあり、同文献の天明元年九月十八日の記録には「春益恠 西岡長垣」とあるので、栢庵と春益は同一人物であることがわかる。

国立国会図書館には『西岡栢庵古稀寿』という資料が蔵されており、題のとおり本資料は栢庵（春益）の古稀を記念して作られた寿巻を写したものであるが、中の記述から春益の古稀は文化元年（一八〇四）であったことがわかる。

よって、野中烏犀圓の誕生に携わった西岡春益の生年は享保二十年（一七三五）、卒年は文化十年（一八一三）としてほぼ確定できる。

なお、右記のとおり、『肥前国誌』は春益の別号を「栢廬」「拙翁」としているが、江村北海編『日本詩選続編（安永八年刊）』は「西岡瑗 字子玉、号栢菴、佐賀侯臣」としている。

以上のことから、西岡春益は名が瑗、字は子玉、栢庵・拙翁などと号したことがわかる。

また数年前、筆者は多久出身の名医・徳永雨卿の寿巻について書いたことがあるが（『歴史に埋もれた名医・徳永雨卿』、佐賀大学地域学歴史文化研究センター刊）、その中に「岡元泰」と称する人物が雨卿の還暦祝いに寄せた書があり、「余や、先生と同郷なり。而して余の東都に遊ぶや、其の通家の子たるを以て視ること猶お子のごとくす」（原漢文。わたしは雨卿先生と同郷である。そしてわたしが江戸

に遊学すると、先生はわたしを、祖先の代から親しくつきあっている家の子として、まるで実子に對するようによくしてくれた」と記している。

実はこの人物こそ、春益の子、西岡長垣であり、このことから、春益は多久出身であると判断される。ちなみに、同じく多久出身の石井鶴山は、江戸遊学中に西岡元泰（長垣）と共に現在の茅場町に居住した時期がある。

紙幅の都合により、今回はとりあえずここまで記す。次回は、西岡春益と藩主治茂の漢詩と書簡による交流について述べる。

第3回 多久百景写真コンテストのご案内

あなたの写真が多久百景に！
(毎年二十景・5年間で百景を認定します)

テーマ 多久の四季・伝統文化・歴史
 応募期間 2019年5月1日～7月31日
 応募料 無料
 応募条件 多久市内で撮られた写真に限定
 詳しくは当財団HPをご覧ください、
 下記へお問い合わせ下さい。

問い合わせ先 公益財団法人 孔子の里
 「多久百景 写真コンテスト」係
 電話 0952-75-5112

🔍 孔子の里 検索

多久聖廟 春季積菜のご案内

日時	平成31年4月18日(木)	10時30分～12時10分	場所	多久聖廟
	執事・伶人 入場	10時～10時20分		(聖廟内)
	献官・祭官 入場	10時20分～10時30分		(聖廟内)
①	積菜(せきさい)	10時30分～11時30分		(聖廟内)
②	積菜の舞	11時30分～11時45分		(聖廟境内)
③	参列生徒の唱歌	11時45分～11時50分		(聖廟境内)
④	揚琴の調べ	11時50分～12時		(聖廟境内)
⑤	孔子の里腰鼓	12時～12時10分		(仰高門前)
	お呈茶	10時～14時		(東原庫舎)

※諸事情により予定を変更する場合がございますので、あらかじめご了承ください。

第二十一回

全国ふるさと漢詩コンテスト

平成三十年十二月二日(日曜)

公開講座 演題『大正天皇の漢詩』

講師 石川 忠久先生

(公益財団法人斯文会理事長・学校法人二松学園顧問)

平成三十年十二月二日(日)、「第二十一回全国ふるさと漢詩コンテスト」の表彰式が行われました。

江戸時代の邑校東原庵舎で学ばれていた古典や漢学に親しんでもらおうと始まったコンテストも二十一回目を迎え、応募総数は年々増加しています。今回は「夜」又は「宵」をテーマに公募され、国内三百六十一名、海外から二名の計三百六十三名の作品が集まり、石川忠久先生と佐藤保先生(お茶の水女子大学名誉教授)に審査いただき、最優秀賞に東京都の川端恵美さんの『春宵』が選ばれました。川端さんの作品は聖廟展示館敷地内に詩文を陶板に刻んだ石碑が建立され除幕式が行われました。

最優秀賞

春宵

湘簾半捲坐春宵

一脈餘寒酒易消

庭院無人冷於水

梨花吹雪月蕭蕭

兵庫県神戸市 川端 恵美

湘簾半ば捲き春宵に坐す

一脈の餘寒酒消し易し

庭院人無く水よりも冷ややかに

梨花雪を吹き月蕭蕭たり

優秀賞

湖辺の夜宴

淡海連山初雪時

青葱野鴨最相宜

舊樓幸有新醅酒

窓外朔風寒月遲

優秀賞

夜蘭若を尋ぬ

獨訪深山認一燈

禪房半夜自清澄

織雲散後見何物

月照緇衣默坐僧

入選

旅の夜

一浴温泉溪上亭

風塵滌去自清寧

何須絲竹管絃興

窓外水聲傾盞聽

入選

江都歲晚

歌管細腰多少樓

繁華想見舊揚州

二分明月孤吟客

半夜鐘聲暗結愁

兵庫県姫路市 前田 隆弘

淡海連山初雪の時

青葱野鴨最も相宜し

旧樓幸いに有り新醅の酒

窓外朔風寒月遅し

神奈川県藤沢市 小嶋明紀子

獨り深山を訪ねて一燈を認む

禪房半夜自ら清澄たり

織雲散じて後何物をか見る

月は照らす緇衣默坐の僧

兵庫県宝塚市 若林 浩

一浴温泉溪上の亭

風塵滌い去つて自ら清寧たり

何ぞ須いん糸竹管絃の興

窓外の水聲盞を傾けて聽く

千葉県松戸市 田沼 裕樹

歌管細腰多少の楼

繁華想見す旧揚州

二分の明月孤吟の客

半夜の鐘声暗に愁を結ぶ

入選

小庭夏夜

入夜雨晴涼氣加

庭梧露滴小池涯

清風一陣暗香動

月下搖搖梔子花

奨励賞

唐津花火大会

盛夏海城昏色浮

渚汀群衆納涼遊

轟音炸裂麗華宴

萬感充胸散積憂

東京都杉並区 高橋 純子

夜に入りて雨晴れ涼氣加わる

庭梧露滴る小池の涯

清風一陣暗香動く

月下揺揺梔子の花

佐賀県唐津市 武藤 宗博

盛夏の海城昏色浮ぶ

渚汀の群衆納涼の遊

轟音炸裂麗華の宴

萬感胸に充ちて積憂を散す



(左から)

多久聖廟雅楽について

— 草場佩川日記より —

賛助会員 江口 正晃

一 はじめに

多久聖廟では、毎年春と秋に孔子様と四配(顔子・曾子・子思子・孟子)の像にお供え物を捧げる積業という儀式を行う。この積業では、雅楽隊が生演奏を行いながら、儀式を進めていく。その雅楽の伝来等については、多久でも知る人が少ない。今回は、多久家家臣、草場佩川の日記にある多久聖廟雅楽について考察する。

二 草場佩川日記の記述

草場佩川日記には、文化十一(一八一四)年六月十五日に多久聖廟雅楽の由来を示す次のような記述がある。

【史料一】

十五日、所伝楽凡二十余曲、自有正楽之拳、己五六年而今始至小成盖旧楽伝自(為左方)寧楽、今所伝為右方、考諸古譜、元禄中、落聖殿因置楽、當時兼用左右、但左方則武富威亮所伝耳、而右方則故使江原・(平次兵衛)河波等(瀬左工門)往学諸京師、(略)

この記述によると雅楽が凡そ二十余曲伝わっており、旧楽は「寧楽」より伝わるとある。「為左方」の記述は、雅楽の由来による分類であり、左方は、中国(唐)と經由して伝来したものである。右方は、朝鮮を源流とするものである。文化十一年には、「今所伝為右方」と左方を「旧楽」と記述しており、右方が主流であったと推測される。雅楽の始まりについては、元禄中に多久聖廟落成に併せて設置されたと考えられる。(聖廟完成は宝永五(一七〇八)年)

また、雅楽が導入された初期には、左方、右方が「兼用」されている。それぞれの由来を見ると左方は、佐賀藩儒者であり、多久聖廟建設にも関わった武富威亮より伝わっており、右方は、江原平次兵衛と河波瀬左工門が京都に行き、右方の楽曲を学んでいる。

三 曲目の変化

雅楽について、文化十一年以降様々な記述があるが、積業での曲目について文化十三年二月に次の記述がある。

【史料二】

七日、積業如例、樂於旧式加拾翠楽・甘州武徳楽・三曲、

この記述から積業にて旧式の雅楽である拾翠楽、甘州、武徳楽を加えたことがわかる。この三曲は史料一で「旧楽」とされていた左方である。

このことから、文化十三年二月の積業では、これまでの右方主流でなく、左方も取り入れた積業に変化したことがわかる。

また、現代の多久聖廟の雅楽隊の楽長(雅楽隊の長)に聞くと、現在の積業では、越天楽、抜頭、合歛塩及び音取(音合わせの曲)のみが伝わっているとのことだった。これらの曲は音取を除くとすべて左方である。

江戸時代に製作されたと推測される『肥前多久東原精舎釋業儀節』という積業の儀式の説明書には雅楽の演奏する部分には、「奏樂 畢奏樂一曲止」と記述があり、特定の曲目が指定されていなかった。このことから時代により積業での雅楽の曲目が変化

していたことが推測される。

四 終わりに

草場佩川の日記の記述から、多久聖廟雅楽の由来とその後の変化についてみる事ができた。史料二の曲目と現在の積業での曲目を比べると、文化十三年以降も変遷があったことがわかる。今後は、他の史料でこの曲目の変遷などを調査していきたい。

【参考文献】

- 三好不二雄監修・三好嘉子校註解題『草場佩川日記(上)』西日本文化協会、一九八〇年
- 細川章著「草場佩川の年譜と著作について―草場家資料を中心に―」(『西南地域史研究』第一輯 文献出版、一九七七年)
- 佐賀県立博物館・多久市教育委員会編集『肥前さが幕末維新博覧会・プレ企画展 没後一五〇年 草場佩川 奇才の遺産』二〇一七年
- 山田淳平「佐賀藩における雅楽文化の展開」(『公益財団法人鍋島報効会研究助成研究報告書第八号』公益財団法人鍋島報効会発行、二〇一八年)



多久家文書

『水江事略』(翻刻文) 紹介 3

長信公譜一 天文十四年己巳ヨリ弘治三年丁氏巳ニ至ル

水江事略卷之二 長信公譜之一(下)

同二十年辛亥 御年十四

御兄弟ハ筑後ニ蟄居セラレ婦人幼少ノ御方々御家来共々御同居有テ誠ニ困窮艱難云フ斗リナシ隆信公ハ佐嘉ニテ潔ク討死セバ斯ル云甲斐ナキ辛苦モアラマシキニ死後レシコソ残念ナレトテ幾度カ自殺セラレント有シカ共人々様々ニ有メ申セシニヨリ死ヲ留リ玉フト云々

家系事績 龍造寺隆信蟄居既ニ三年一属二百人財器雜具ヲ賣テ日々生活ストイヘトモ周カラス究困稍迫ル爰ニ於テ鍋嶋清房小河納富ヲ會シテ曰我龍造寺ニ死セス□ニ爰ニ到ル日夜一属ノ艱苦ヲ見ル是尸ノ上ノ恥辱ナリ後悔更ニ益ナシ人ノ國ニ餓死センヨリ所詮妻子ヲ刺殺シ切腹シテ快ク□ント既ニ事ニ及ハントス清房有テ曰ハ八足下ノ短慮ナリ夫自殺ハ輕フシテ易シ身ヲ全フスルハ重フシテ難シ何ソ其輕キニ属シテ其重キニ就サル且爰ニ母君有リ郎従アリ一百餘人豈犬死センヤ未練ト云ベシ我輩一ツノ方便アリ安居シテ待玉ヘト云々

秋九月朔日太宰大貳兵部卿義隆老臣陶尾張守晴賢力為ニ殺セラルサシモ中國ニ名ヲ得シ大内氏ノ血脉此時ニ断絶ス晴賢大ニ權柄ヲ振ヒ大友義鎮ノ弟三郎ト云シヲ迎ヘ取左京太夫義長ト改ム大内ノ名跡ヲ継カシメ京都ニ術職ス晴賢ハ剃髮シテ全姜ト名付ク大友大内合体シテ九國弥下風ニ從フ今年夏ノ比鴨打陸奥守胤忠(小城郡芦ヶ里ノ城主)兵船ヲ仕立家人江口若狭ヲサシ遣シ隆信公御一族ヲ迎ントス是兼テ密々ニ内通スル故ナリ御兄弟及ヒ御親族皆々船ニ乘リ芦ヶ里ニ渡サルサレトモ未御運ヤ開カサリケン逆風俄ニ起リ御一族ノ船々皆散々ニ吹離サル隆公の

御船ノミ辛フシテ江内へ入ル事ヲ得タリ時ニ胤忠カ

兄弟ニ鴨打美濃守同新左衛門尉ト云者アリ千葉ノ頼胤徳嶋山田等ト一味シ隆公ヲ討取ント謀ル胤忠聞テ大ニ驚キ家人古賀因幡守ヲ遣シシカシカノ由ヲ申上速カニ御船ヲ漕返サシム逆黨等憎キ胤忠カ仕形カナト却テ胤忠ヲ伐ントス胤忠後藤山ニ引退ク

或説ニ云胤忠隆公ノ一味ナルカ故芦ヶ里ニ居住叶ハス後藤氏ニ便リテ武雄ニ居ル芦ヶ里ニハ小田政光方家老山田河内鴨打新左衛門ト入代テ是ヲ守ル胤忠ニ告テ曰我隆公ニ味方シテ兵ヲ起サンスル間御邊御船ヲ遣シテ速ニ迎ヘラレヨト誠シヤカニ申ケレバ胤忠サモアラント大ニ悦ビ先飛脚ヲ遣シシカシカノ由申上追々船ヲ仕立テ迎ヘ奉ル仍テ隆公長公以下ノ御方芦ヶ里ニ到ルト又云天文二十年大友義鎮其威旧日ニ倍シ九州ヲ并吞セント志シ肥筑ノ諸士ヲ諭シテ曰小貳氏ハ古来の名家成シニ冬尚今零落シテアレトモ無カ如シ義鎮深ク是ヲ愁フ各旧好ヲ忘レスンバ冬尚ヲ取立宰府ニ安堵セシメバヤ肥筑ノ諸士皆感激シテ是ニ應ス隆公獨リ是ヲ肯ヒ玉ハス諸城主相會シテ云隆信不順ナリイザ是ヲ討テ一味ノ驥トセン衆議決ス

家系事績 肥筑ノ諸士大友ニ一味スル者多シ隆公喟然トシテ嘆シテ云甚シヒカナ世運ノ衰ハタルヤ天下威ナキカ故ニ諸侯劫奪ス如今武威盛ナルモノバ誰カ能是ヲ制センツラツラ鎮西ノ時勢糺ヲ見ルニ小貳衰テ探題有リ探題散シテ大友命ヲ受ク近代大内政弘小貳政資大友親政ヲ三屋形ト称ス政資亡ヒテ大内義隆九國ヲ管領ス義隆害セラレテ毛利元就其仇ヲ報ス是義ニ當ル所天下是ヲ許ス然ルニ義鎮逆徒ヲ驅催シ九州ヲ取ラントス私ノ慾ナリ且近年大友ノ家風奢侈ニシテ麾下不順ナリ其亡ン事久カラス我大友ニ背ス非ス私ノ指揮ヲ受ケザルマテナリト聘使ヲ安藝ニ遣シ元就ヲ賀ス

鎮西志 夏龍造寺民部太輔使ヲ遣ハシテ受領實名ヲ大内義隆卿ニ請フ家ノ紋ト家系トヲ号ス(此時大内九州ノ諸事ヲ支配ス諸將ノ官位等山口ヨリ吹撃ノ状出ルト云) 七月朔日龍造寺民部太輔山城守ト改メ隆信ト名付

ク義隆ノ吹撃状ニ云

山城守所望之事可奉申京都之状如件

天文十九年

七月一日

龍造寺山城守殿

実名之事

隆信

天文十九年

七月一日

龍造寺山城守殿

義隆 判

龍造寺家ノ紋日光ナリ家傳ヲ略シテ曰往昔先祖初テ下ル時夢ニ旭日ノ光晃トシテ身ヲ照スヲ見ル夢醒テ則見ル旭日東ニ映シテ光リ身ニ徹ス其儘夢ニ見ル處ノ如シ爰ニ於テ其晃曜ヲ旗ニ書ク向フ所利ヲ得居ル所運ヲ開ク夫ヨリ長ク傳ヘテ家ノ紋トス日光ノ紋是ナリ

惣領ニハ十二日光ヲ用ヒ庶子ニハ十一日光ヲ或ハ十日光ヲ用ユ數多キハ長棟數少キハ末流當家ノ嫡庶分ツテ斯ノ如シ 義隆ノ宰臣陶尾張守隆房事ヲ隆信ニ致シテ云 皇府亂劇之次第不慮ノ義ニ候就中其表異 義之由可然候珍敷義候ハ、重疊示可給候豊 前守殿別而申承候筋目無相違承候本望ニ候 於愚身不可有餘義候委細猶使者可被 申候恐々謹言 七月二日 隆房 在判 龍造寺山城守殿

鎮西志 陶尾張守隆房翌年隆房ノ名ヲ嫡子五郎ニ授ケ自ラ改テ晴賢ト名付テ當時防府ノ權威一人ニ歸ス防州若山ノ城ニ在テ國政ヲ預リ聞其先祖陶盛房ト云者大内ノ正統周防ノ介惟義ノ舍弟ニシテ同胞ノ分レタルモノナリ世嗣五郎隆房ナリ

同二十一年壬子 御年十五

二十一年夏龍造寺隆信(年二十四)筑後ニ在リ豊後ニ遣シ禮恭ヲ修ス但是蒲池鑑盛カ封内ニ在テ懇情ヲ受ルヲ以テナリ

家系事績 與賀ノ庄實久村ノ長副嶋新右衛門村岡次右衛門鹿子村ノ長御厨安藝副嶋民部飯盛村ノ長富吉主水彼等五人田地五六十町ヲ抱持シテ皆有徳ノ者ナリ志ヲ隆信ニ通スルトイヘトモ高木鑑房當庄ヲ守テ其代官日

夜村々ヲ護衛ス仍テ運送ヲ通シ難ク然レトモ五人ノ者力ヲ合セ與賀津ノ船吏村岡藤七カ船ニ糧料塩噌ノ類ヲ積ミ天草廻リニ事寄セ江ヲ渡ス一木ニ至ル福地長門ニ付テ是ヲ呈ス長門ハ安藝カ婿ナルカ故ナリ隆信大ニ悦

ヒ感状ヲ授ケテ是ヲ褒ス且歸國ノ計策ヲ含メテ國ニ歸ラシム小田政光隆信甚困窮ニ及フト聞深町理忠ヲシテ糧米二百俵ヲ贈ラシム與賀河副両庄ノ村長鹿江内田南里古賀石井等ノ諸曹各糧糧金銀分ニ應シテ是ヲ贈ル

隆公鍋嶋清房公ト御相談有テ御使ヲ御國ニ遣ハサレ旧好ノ輩ヲ相招カル與賀河副ノ郷士鹿江遠江守兼明内田美作守兼能太田美濃守源舜南里ノ一族石井ノ一黨御厨安藝村岡慶運副嶋式部同新右衛門村岡右衛門古閑七郎兵衛富吉主

水及ヒ久米徳永金持飯盛野田山田新郷石丸等ノ地士兼テ志ヲ隆公ニ通セシ輩ナレバ異義ナク御味方ニ属ストイエドモ高木鑑房カ家人御國堺ヲ守リ警衛嚴重ナリシカバ如何トモスベキ様ナシ乍然旧好相違ナク密々ニ音信ヲ通ス

又神文ヲ捧ケテ志ノ程ヲ顯すハス是□於テ福地長門守(時二主刑ト云)隆公ノ御使トシテ御國ニ歸ル□公モ亦御家来吉岡藏人助早田次郎右衛門威ヲ御使ト□テ遣ハサル主従三四百人ツ、小松ニ乗テ鹿子江ニ渡ル□レトモ敵方警固ノ兵共ヒシト海邊ヲ守リシカバ陸ニ□ル事ヲ得ス晝ハ

芦原ノ蔭ニカケレ忍ヒ夜中辛フシテ□方ニ着キ先村岡カ家ニ忍入隠レ居ル事五六日カ間□□夜々村長ト出會シ兵ヲ起サン計議ヲ成ス首長七人ノ□一番ニ神文ヲ捧ケテ御味方ニ參ル其人々ニハ村岡副嶋古閑厨久米徳久富吉ナリ會所ハ鹿子村天神ノ社ナ□談決ノ上ハ福地等筑後ニ立歸リシカジカノ由ヲ申上首長等モ共々筑後ニ来リ御目見

申上シカバ隆公ハ大悦ヒ玉ヒ我若運開テ國ニ歸ル事ヲ得ハ汝等ノ曰君他方ニ在ス事最早三ヶ年ノ間ニ候ヘバ御差支モアセラレンニ又三ヶ年間モ無米無役ニテハ何ヲ以テ相續ネシ玉ハハ此義ハ御断申上ベシ斯有難キ思召ニハバ御歸國ノ後永々斗成半公役ニシテ他役ヲ免シ玉邪曲ノ代官ヲ居ヘ玉ハズ郷民等ノ公事訴訟ハ御直ニ聞有テ御裁許成下サルモノナラバ郷民等カ安堵此上候ラベキ若此儀御許容アラバ後日ノ為御神文ヲ賜ハルベシトゾ願ヒタリ是ニ依テ御兄弟七ヶ條ノ御誓文ヲ認メラレテ首長等二下サル福地納富小河我公ノ家臣村山内藏助石井藤兵衛尉鷲崎主殿助等連判ス扱筑後ト御國ノ計略相調フニ依テ鹿江遠江守南里兄弟内田太田石井一族兵船ヲ仕立両公ヲ迎奉ル

而公急キ御親族七十人餘ト松ニメサレ寺井江ヲ渡リ鹿江ニ御着有テ威徳寺ニ御陣ヲ居ヘラレ先相圖ノ狼烟ヲ揚玉フ是ヲ見テ與賀河副ノ郷民等我先ニ来リ集ルモノ二千餘人蒲池鑑盛カ加勢ノ兵三百餘人原十郎惠俊父子三人モ亦是ニ從フ時二七月二十七日ナリ(或ハ二十五日トモ)隆信公我公ト共ニ西ノテ與賀ノ津ニ相進マル隆公長音寺公ハ瑞雲菴ニ陣セラル鍋嶋清房公ニ從フ母公及幼若ノ御方々ハ副嶋新右衛門カ家ニ入ラル隆公ハ天神ノ祠ニ詣テ御開運ノ御祈有テ田地ヲ當社ニ寄付セラル毎月二十五日ノ祭料ナリトソ七人ノ首長相議シテ云祭料ハ自力ヲ用ユベシ今幸ニ此寄附エオ以テ神殿ヲ修造スベシトテ御厨安藝ヲ本願トシ而殿及門橋等ヲ州營ス扱毛隆信公ハ兵ヲ佐嘉ニ進メラル鹿江父子一族太田内田南里石井等先鋒タリ

御厨安藝弓ノ兵五十人ヲ率ヒテ大内副東西ノ堀権現堂ニ至テ是ヲ守大内副ノ口ハ本村古閑ノ一族是ヲ守ル末次口ハ実久ニ一揆正里ノ口ハ飯盛上下ノ一揆厘外口ハ須古寄合ノ一揆各堤等ヲ守ル小田政光高木鑑房八戸宗暢神代勝利等カ兵ト日々相戦ヒ我軍度々ヲ取ル八月上旬隆公本庄ノ軍ニ勝十五軍ト称ル是ナリ進テ梅林菴ニ陣ス火ヲ放テ宗暢カ皆ヲ焚ク同月八日鍋嶋三郎兵衛尉信房同四郎兵衛尉小河筑後納富但馬守福地長門守石井一族南里鹿江内田等類ニ進テ城ヲ圍ミ皆柵ヲ打破テヒタヒタト本城ニ附ク

同月十九日ナリ城主宗暢降ヲ乞フ隆公是ヲ免シテ外皆七カ所ヲ破ラシム勝利モ亦加勢トシテ當城ニ在リ和平シテ去ル

一説ニ云與賀ノ郷民不順ナリト聞ヘアリ水町左京忍人テ富吉河内ヲ捕ヘ人質ヲ取ル并村長五人ノ人質ヲ取ル郷中皆從フ飯盛ノ館ヲ攻取ル是ヲ軍ノ首途トス又云小田政光佐嘉ノ城ヲ守ル八戸宗暢十五村ニ出陣ス公ハ王子ノ宮ニ陣ス石井鹿江南里等進テ十五ノ陣ヲ破リ討取ル所ノ首塚今猶存ス小田政光一戦ニモ及ハズ城ヲ避テ東ニ走ル公本城ニ歸ル

又云勝利此時高峯ノヲ守ル隆公七人ノ首長ニ命シテ云ク勝利ヲ攻ルニ於テハ其賞ハ其功ニヨルベシ諸長等大ニ勳ミ三方ヨリ是ヲ攻ム勝利打負テ北ノ口ヨリ城ヲ落夕爰ニ於テ十九人ノ城主等悉ク城ヲ去リ大半ハ隆公ニ降參スト云々

龍造寺鑑兼城ヲ去ル小田政光高木両家其一味ノ輩ミナ方々ニ逃失セタリ爰ニ於テ二公鍋嶋清房以下七十餘人各旧宅ニ歸入ラル夫ヨリ隆公逆黨ノ罰ヲ鳴サンヨテ或ハ北ノ方高木神代ト戦ヒ或ハ東ニ向ヒ小田政光ト戦ヒ日々兵ヲ交フ政光ハ高尾江ヲ界トシテ時々矢車ヲ挑ム

或云ニ隆公鑑兼ヲ責テ仰ケルハ一家ノ棟梁ニシテ他ノ謀計ニ落ツ其罪逃ル、處ナシト終ニ水江ノ一跡ヲ放テ是ヲ長信公ニ與ヘラル鑑兼ノ室ハ千葉胤繁ノ女ナリ此縁ニ因テ小城ニ蟄居ス其後誓紙ヲ捧ケテ罪ナキ由ヲ訴フ漸ク免許ヲ蒙テ新地ヲ横邊田ニ賜ハル

同二十二年癸丑 御年十六

十月八日隆公小田鎮光ト木原ニ於テ御合戦アリ政光カ兵敗ル我軍進テ駕與丁ニ向フ大狂ノ城ヲ攻シカ為ナリ(大狂小狂今ノ蓮ノ池ト云)小河筑後守信安納富但馬守信景福地長門守鹿江遠江守同伯耆守内田美作守南里治部太輔

父子兄弟一族石井一黨三十餘人太田美濃守副嶋古閑御厨久米徳久山田飯盛以下與賀本庄河副ノ郷士都合三千餘人同十六日犬尾増田山津村ヲ打過テ駕與丁口ニ発向ス公モ亦手勢五百人ヲ率ヒテ相從ハル是御出陣ノ初ナリトソ城

主政光堅甲利兵ヲ以テ固ク城ヲ守ル城ハ無双ノ要害ナリ容易ク落ツベシトモ見ヘサリケリ小田ノ一族小田隱岐守

同美濃守同掃部助江口元清深町理忠及原山田井手久池井園田大隈栗林等ヲ卒伍ノ長トシテ驍勇ノ武士數百人突出テ大ニ防キ戰フ其上犬塚一族蒲田ヨリ来リ本居ノ一族ハ本居ヨリ来リ各多勢ヲ以テ政光ヲ援フ彼等ハ皆政光ノ縁者ニシテ武勇ノ聞ヘアル者ナリ共ニ雌雄ヲ決セント萬死ニ入テ一生ヲ顧ミス力ヲ盡シテ打戰フ爰ニ於テ隆公ノ先手忽チ敗レ討死手負數ヲ知ラス南里治部太輔同左衛門太輔同宮内少輔一族五十餘人討死ス其他石井犬塚鹿江野田久米古閑御厨以下戰死ノ者多シ城兵弥競ヒ進ミ隆公ノ旗本ニ打懸ル旗本モ今ハ敗レント見ヘシ所公短兵急ニ打テ懸リ敵ヲ四方ニ切散シ討取首數多ナリ家臣左右ヲ離レテ敵ヲ討取リ功ヲ顯ハス政光新テ兵ヲ以テ城中ヨリ突テ出ニ公ノ備ニ切懸ル兩陣互ニ馳逐ヒ血烟立テ戰ヒシカニ公ノ兵大ニ勞レ今ハ惣崩ニ及ハントス時ニ鍋嶋清房同信房同左衛門太輔信安父子一族二百餘人真シグラニ馳來リ敵ノ中軍ニ突テ入り激戰ヒシカバニ公ノ兵是ニ機ニ得テ備ヲ立直シ再ヒ力戰シ終ニ敵陣ヲ切崩ス爰ニ於テ城上江口元清深町理忠園田三河討死ス三子ハ小田家ニ於テ武勇ノ聞ヘ有モノナリ(世ニ小田家三人ノ鎗柱ト稱スルモノ共ナリ理忠踏張レ三河トテ名ヲ得シ輩ナリ) 其外本居增景大塚左衛門太輔小田掃部介以下討死都テ六百餘人政光城ニ入テ下城ノ扱ヒニ及フ政光ハ妻子郎從三百餘人ヲ引具シテ筑後ノ兼行村ニ到テ(兼行村ハ三猪郡ニアリ) 蟄居セリ二公ハ手ニ餘ル大狂ノ城ヲ討平ケ武威ヲ揚テ御歸陣アリ我功此時迄采女政信公ト稱セラレ水得ノ城主ナリシ

邊何事カ一ツノ手柄ヲ顯ハサバ其時コソ父ノ仰ニ任スベシトナリ犬五郎ハ平日此事ヲ心ニ懸テ忘レザリシカ此度ノ合戰其働キ拔群ニシテ名アル敵ヲ分捕シ兄ノ前ニ捧ケケレハ長門大ニ悦ヒ其俣犬五郎ヲ引連我公ノ陣ニ來ルチチノ遺言ノ事ヨリシテ有リシ次第ヲ申上シカバ公大ニ御感心有テ直ニ御家臣ニ成サレタリ是則多福地ノ祖ナリ
既ニシテ隆信公土橋加賀守ヲ捕ヘテ是ヲ誅セラル逆黨張本人ナルカ故ナリ是ヨリ諸方ノ敵徒日ヲ追テ平伏ス
或説ニ云土橋伊賀守罪ヲ遁ル、二道ナク他方ニ行ントセシヲ其罪ヲ鳴ラシテ是ヲ誅セラル西村伊豫守ハ増闡法師ヲ以テ隆公ニ申様某生キテ本意ヲ失ヒ狂テ群邪ヲ受臍ヲ噬トモ及ハズ死ヲ致シテ謝セント欲スルノミ公モシ罪ヲ宥シテ相當ノ地ヲ賜ハラバ永ク御馬ノ口ヲモ取テ御用ニ相立ベシ隆公其深實ヲ御感有テ其科ヲ許サ
龍造寺鑑兼或ハ二公ノ母堂ニヨリ或ハ鹿江兼明ヲ頼ミテ度々先非ヲ陳謝ストイエトモ許サレ終ニ東目三根郡ニ浪牟ス立去ル時我公ノ家長四人ニ遣ス嘆状アリ左ニ
態与用(一書)候仍而我等在國之義至隆信鹿速雖
口能候終に免御納得候手切候付にも近年企不表各別
候之上ハ當時強而不及説言先一旦速旅候於今ハ深々歎
非と改め先祖以來之筋目順路と可相守覚悟之外一毛も
不存別表候之奈何様方角より不指置折々還位之表
可申歎候併又萬一佐神之間ニ愚事出來候而若し隆信
家信御難義之子細候ハバ其時ハ明日成共馳來相當之
御用ニ立此前之不義不動と可相晴地盤ニ候尤於御同意
ハ盡未來際不可存異表候之旨以罰文一途に可申談候
乍恐以御真實實被加御不便候而大小事隆信家信へ今隨身
一方之御手とひき申文箱とも腰に付け随分致奉公候
諸神ハ幅非當意表裏之申事候先年親ニ候之者一乳
之刻ニ者年少候之奈不并善惡候其上剛忠被居候
之間無氣違候つる此度自分の折角殊に當郡と立去
事名残惜候一両日中他出候之奈為暇乞委細申候
露命ながらへ候ハバ目出度可遂再會候恐々謹言

十月廿六日
鷲崎主殿先殿
慶賀 入道殿
村山内藏助殿
石井藤六衛殿
御宿所
近々我等還任之義内々御心懸頼申候何様折々
訖言可申候此由家信御母儀さま(具ニ御披露頼ミ
申候又我等被官之者共少々其あざりに可致隠位
に裁各以御心得無異義之様ニ有度候自然蓮池
方之字人衆とおはされ候而ハ迷惑□□山城
守殿へ帰参いたし御用ニ可罷立候間さてハさのミ□□
心も有向歎候此表第一頼申候
其妻子郎從處ヲ離レ栖家ヲ去テ愁苦言語ニ絶タリ昨日ノ
榮花今日ノ悲哀トハコトワリナルカナ仰鑑兼ト隆公トハ
一家一族ノ御近親ナリ其上御妹婿ニシテ尤親シク御睦シ
アルベキ御中成ニ斯ク寇敵ノ振廻ハ何事ゾヤ只佞臣ノ輩
有テカ、ル結構ニ及ヒシナリ扱隆公ハ鑑兼ノ采地居館ヲ
以テ我公ニ授ケラル我公水江東西ヲ併セ領シテ惣領職ニ
立玉フ
冬十二月加冠ヲ大内左京太夫義長ニ請フテ彈正忠長信公
ト改メラル(此時迄采女正家信公ト云シ) 此比佐嘉府城
ニ公ヲ稱シテ御兩殿ト云ヒシトナリ
同二十三年甲寅 御年十七
二公御相談有テ光圓寺ヲ水江館ノ南ニ建ラル仙叔榮壽禪
師ヲ以テ開山トス仙叔ハ木下氏ニシテ伊豫入道覺順ノ子
當家ノ譜代ニシテ殊ニハ二公ニ功アル僧ナリ二公其功ヲ
御感賞ニ依テ父順覺カ居宅ヲ以テ寂道場トセラレ年貢ヲ
除キ又田地ヲ御寄附アリ
弘治元年乙卯 御年十八
三月隆公軍ヲ率テ江上武種ヲ御征伐アリ我公モ亦兵ヲ率
テ發行セラル御軍御勝利有テ御歸陣ナリ
或説ニ云鍋嶋信昌公隆公ニ告テ云國中不順ニシテハ争
テカ他方ヲ徇ヘン某久シク小城ニ在テ西方ニ縁アリ願
クハ御暇ヲ給ハツテ調略ヲ試ン隆公尤ナリ御邊力計ラ

ヒニ任スベシ信昌即日晴氣ニ行キ千葉胤連龍造寺鑑兼ト相談シテ多久ニ赴キ士ヲ懐ケ民ヲ撫テ潛ニ諸士ノ志アル者ニ通ス

同二年丙辰 御年十九

母公（慶間夫人ナリニ公ノ御母水江ノ太方ト唱ヘシト）自ラ子鍋嶋駿河守清房公ノ家ニ御入有テ嫁セラル時ニ御齡四十餘ナリ是ハ深キ御思慮有テノ御事ナリト云

傳ニ云夫人兼テ鍋嶋直茂（此時左衛門太夫御年十九）ノ人トナリヲ能ク御覽有テ御子トセラレニ公ト御兄弟ノ縁ヲ結ハレニ公ヲ相助ケ家業御興隆アラントノ御深慮ナリ

家系事績 公ノ母堂思食ニハ夫周家不幸ニシテ世ヲ早フス隆信大志有テ父祖ノ名ヲ揚ントス孝ト云ベシ今天下定ラス諸侯雄ヲ争フ威ヲ立ル所ハ人ヲ得レバナリ我當家ノ諸士ヲ見ルニ鍋嶋カ子ニ及フモノナシ隆信ト兄弟ノ縁ヲ結ハシメ我家ヲ興スベシ或曰清房ニ語テ曰鱈閨頼モシゲナシ我吾子ニ媒セン清房肯テセス則吉日ヲ擇ミ相約ス期ニ及テ自ラ與ヲ入ル龍家ノ興隆爰ニ在リ賢女ナリト云ベシ後日國政多クハ夫人ノ賢慮ヨリ出タリ

同三年丁巳 御年二十

正月隆公八戸宗暘ヲ御征伐有テ八戸ノ城ヲ攻破ラル宗暘北山ニ逃入テ神代勝利ト一手ニ成隆公是ヲ追伐セラレン為高城山ノ城ヲ構ヘラル小河筑後守城番タリ弟小河左近太輔以下數百人御手ニ属シテ是ヲ守ル隆公成富甲斐守（兵庫助力父）ヲ上佐嘉ニ遣ハサレ尼寺國府朽井北村五領長瀬等ノ村長ヲ誘ハシム爰ニ於テ久松久保朽井萩原大石陣内北原以下數人は二應ス其手ノ兵五百餘人ニ及フト云々

九月神代勝利山内ヨリ不意突出テ高城ノ城ヲ襲ヒ小河左近以下數十人ヲ討取早足ニ山内ニ引入タリ此時筑後守ハ龍造寺ニ在テ是ヲ聞テ大ニ驚キ早速兵ヲ率ヒテ上佐嘉ニ發行ス與力郎等我先ニト馳付タリニ公モ御出馬有テ河上ニ相向ハル時二十月十四日ナリ上佐嘉ノ村長等先鋒ヲ勤ム成富甲斐守是ヲ率ユ筑後守高城山ノ城ニ馳上リ又進テ金敷峠ニ上ル勝利北ノ峯ヨリ突出筑後守ト鎗ヲ合セ七烈敷

相戦フ兩人トモニ手ヲ負ヒ筑後守終ニ討タル殘黨全カラス佐嘉勢大ニ崩レ死創數ヲ知ラス我公ノ長臣石井尾張守鶴田右京（石京ハ鹿子ノ人）以下の數人討死ス勝利勝ニ乘シテ河上ノ口ニ押下ル我公ノ一列成富ノ手ノ兵北口ヲ守リ相支ヘテ血戦ス我臣吉岡藏人同舎人敵梅野兵部ヲ討取テ兄弟一所ニ討死勝利カ士卒卒モ死創數ヲ知ラストイエドモ勝利武勇絶倫ニシテ少シモ撓マズ進ミ戰テ終ニ我軍ヲ破ルニ公兵ヲ引テ御歸陣有世ニ金敷崩レト唱ルハ是ナリ

家系事績 大友義鎮肥前ノ諸士ヲ催促シテ云龍造寺隆信自立ノ志有テ小貳氏ニ從ハス義鎮不肖ナリトイヘドモ小貳家ヲ起サント欲ス八戸神代高木小田ノ輩志ヲ同シ龍造寺ヲ伐モノナラハ隆信ヤハカ降ラサラント隆信是ヲ聞召サレ急ニ八戸ノ砦ヲ攻抜カル宗暢山内ニ奔ル小河筑後守ヲシテ春日山ノ城ヲ構ヘシム弟左近普請ヲ奉行ス間ヲ入レテ山内ノ士多ク是ニ從ハシム勝利隙ヲ伺テ左近ヲ討つ捕筑後ハ山内ノ境ヲ見ントテ梅野彈正ヲ按内トシテ金敷峠ニ攀登ル勝利是ヲ幸トシテ一人馳來ル神代源内先梅野ト組テ谷ニ轉ヒ落彈正カ首ヲ取ル勝利筑後ト鎗ヲ合セ互ニ手ヲ負ヒ筑後討レタリ春日山ノ軍士競ヒ來リシカドモ勝利速ク去ル公其註進ヲ得テ早速御馬ヲ出サレ河上ノ東畔ニ陣セラル搦手ニ兵尼寺北原ニ充滿ス勝利熊峰ニ陣シ長良名尾山ヨリ出テ搦手ノ陣ヲ打破ル追打テ高木ヲ過ク石井尾張犬塚七左衛門副嶋平兵衛討死ス成富甲斐近隣ノ郷士ヲ從ヘテ旗本ヲ警固ス公ニ申テ曰敵勝ニ乘テ跡ヲ遮ル險阻ノ中ニ戰ハシヨリハ退テ敵ヲ平場ニ拉カン公尤ナリトテ軍ヲ返サル敵退去ル翌日山内ヲ攻メ鑑兼長信信周先ヲ争テ攻入勝利軍敗レテ筑前長野ニ奔ル翌年熊ノ川ニ歸ル

退職のご挨拶

江口 正晃

孔子の里に勤め始め、六年間が過ぎました。何も知らない若造が事務局長として勤めるにあたり、多くの方々からご支援をいただきました。最初の頃は、人脈もなく、会議のたびに緊張していました。しかし、今では、多くの方々とお話ができ、いつの間にか多気がふるさとなっていました。

元々は、卒業論文で草場佩川日記から江戸時代の郷学校を研究したことが多久聖廟・東原庵舎との出会いです。在職中は、西村隆司評議員、服部政昭常務理事をはじめ、多くの方々に多久の歴史についてお教えいただき、郷土の歴史研究の大切さや楽しさと合わせて、埋もれ行くふるさとの歴史や文化財の危機についても教えていただきました。

事務職としては、素人だった私を、横尾理事長を始め、教育委員会の福島係長や歴代の常務理事の方々よりご教授いただき、育てていただきました。また、つらいとき、大変な時は、財団スタッフの亀川さんと陣内さん、趙勇さん、吉松さんに支えてもらいました。本当にありがとうございました。

退職後は、新しい仕事にチャレンジいたしますが、公益財団法人孔子の里で培った知識や経験を活かしていきたいと思っております。

最後になりましたが、公益財団法人孔子の里、多久市の益々のご発展を祈念いたしますとともに、皆様方のご多幸を心からお祈りする次第であります。ありがとうございました。

肥前国多久邑八景詩紹介 (其の五)

天山晴雪

最愛孱顔雪後容
 最可愛ス孱顔雪後ノ容
 半濃半淡影相重
 半濃半淡影相イ重ナル
 蓬婆休説千年色
 蓬婆説クヲ休メヨ千年ノ色
 移得富山第一峯
 移シ得タリ富山第一峯

諸官快堂 林信允士信甫

天山晴雪

乾坤時挙目
 朔雪冽天山
 晴見千秋色
 馮軒心自官

乾坤時二目ヲ挙レバ
 朔雪ノ天山冽シ
 晴テ見ユ千秋ノ色
 軒ニ馮レバ心自カラ官ナリ

経筵講官 林信智艸



第二十四回 多久市論語カルタ大会入賞者

十一月二十三日(金・祝)、第二十四回多久市論語カルタ大会が東原摩舎中央校体育館で開催されました。

百二十八名が参加し、論語カルタの札を取る子供たちの声や応援の保護者の方たちの声援が会場いっぱいに響き渡りました。

入賞者は次のとおりです。

- 十一月二十三日(金・祝)、第二十四回多久市論語カルタ大会が東原摩舎中央校体育館で開催されました。
- 百二十八名が参加し、論語カルタの札を取る子供たちの声や応援の保護者の方たちの声援が会場いっぱいに響き渡りました。
- 入賞者は次のとおりです。
- 【幼稚園・保育園の部】
 - ・優勝 吉田淳一郎(こぼと保育園)
 - ・準優勝 松永 蓮和(こぼと保育園)
 - ・三位 山口 海心(こぼと保育園)
 - 【小学一年生の部】
 - ・優勝 紙谷 薫(中央校)
 - ・準優勝 山田 紋夢(東部校)
 - ・三位 宗 心菜(中央校)
 - 【小学二年生の部】
 - ・優勝 山田 麻衣(東部校)
 - ・準優勝 村川虎太郎(中央校)
 - ・三位 西山 柚咲(中央校)
 - 【小学三年生の部】
 - ・優勝 北島 拓実(東部校)
 - ・準優勝 吉田 凜音(中央校)
 - ・三位 梶原 宏聖(西溪校)
 - 【小学四年生の部】
 - ・優勝 徳島 唯(東部校)
 - ・準優勝 徳重 瓢(東部校)
 - 【小学五年生の部】
 - ・三位 野田 千裕(東部校)
 - ・優勝 山本 來愛(西溪校)
 - ・準優勝 北島 薫(東部校)
 - ・三位 岸川 あこ(西溪校)
 - 【小学六年生の部】
 - ・優勝 永田 夕佳(西溪校)
 - ・準優勝 田代 渚咲(東部校)
 - ・三位 川浪 希羽(西溪校)
 - 【中学生の部】
 - ・優勝 山本 真愛(西溪校)
 - ・準優勝 堤 彩花(西溪校)
 - ・三位 徳重こと李(致遠館)
 - 【高校・一般の部】
 - ・優勝 川副 蓮実
 - ・準優勝 隅川 瞳
 - ・三位 吉谷 晋作
 - 合六 晴佳(チーム東)

《儒林》

多久では先覚者・先賢を儒林と呼んでいる

徳永雨卿 (一七二五～一七九三年)

桐岡徳永先生碑

先生肥前佐賀侯之侍醫也、姓徳永、諱田、字雨卿、號桐岡、又號享菴、考諱鼎、稱正兵衛、妣木下氏、以正徳五年、乙未、七月、四日、生先生本州多久、六世之祖曰松浦八郎左衛門景光、渡邊綱之苗裔也、景光少而為岩永因幡守所養、長、故為岩永氏、及其仕于佐賀侯諱隆信、改姓徳永、時侯、封其弟諱長信主多久、因使徳永氏屬之、遂為多久之臣云、先生弱冠、學醫於長崎、師事良醫真駿菴、十年業成、去遊京師、在後藤氏之門、益與諸名工、研精其技焉、居二年、東入關、數年而名興、其業日廣、遂以良醫稱焉、年六十四、疾聞之、召見祿之、命侍君夫人、守職十有三年、恩寵日厚焉、年七十六、乞老、乃使其子聰字明卿襲祿繼業日別廩先生以優之、寛政五年、癸丑、九月、二十七日、終于東都日本橋西橋橋居、壽七十有九矣、葬之深川増林禪寺、明卿學于余、因請銘其碑、余年二十四、始與先生定交、遂骨肉相視四十有三年、嘗病將死者數、而皆頼先生乃治以得蘇、於是辭而作銘、銘曰、上醫所志、身非其時、修藥治毒、司命其誰、富貴有人、貧賤在台、疾病於己、如帶創痍、起死忘徳、賑乏忘貲、處窮如守、出泰如疑、克保其寵、沒齒不襄、嗚呼堅石、概是乎斯、

細井平洲の『櫻鳴館遺稿』卷之八に掲載されている雨卿の墓碑銘です。

徳永雨卿は多久では無名に近い存在でした。『旧多久邑人物小誌』に、「徳永栄庵、通称田、初め享菴後栄庵と改む。江戸に赴き医を学び、其名四方に顕はる。会、米沢侯藩に在りて、疾篤く、招かれて其奇効を奏するや、安永七年冬術を以て公に升れり。後佐賀藩徴して典医となし、祿四十石を賜ひ、加棒十五石、没年不詳。」とわずかな記録が残っているだけでした。

墓碑文によれば、「姓は徳永、諱は田、字は雨卿、号は桐岡、又は享庵と号す。父の諱は鼎、正兵衛。母は木下氏。正徳五年乙未（一七一五）七月四日、多久の生まれ。松浦党の一族で、龍造寺長信の時に多久の家臣となり、郷校で学んだ後、長崎に出て医師真野駿菴に十年間学び、京都の後藤良山の下で二年間の研鑽を重ねて江戸に行き数年で良医と呼ばれるようになった。六十四歳の時に、八代佐賀藩主治茂に抜擢されて江戸藩邸の奥医師となり、七十六歳で子の明卿が後を継ぐ。癸丑（寛政五年・一七九三）九月二十七日、日本橋西の寓居で没す。寿七十九歳。深川の増林禪寺に葬る。明卿は私に学んだので、碑銘を願って来た。私は二十四歳の時に雨卿先生との交わりを始めて、今では兄弟同様の仲である。私は四十三歳の時に病にかかり死に至るような事が度々あったが、先生の治療で蘇った。だから私は明卿の願いを辞せずして銘を作る。」と平洲は書いています。

先日、深川の増林寺を訪れた。日本橋から墨田川に架かる永代橋を渡って深川に入る。歩いて約四十分余、清澄庭園の近くに在る寺では、雨卿の墓碑を確認することが出来なかった。

昭和二十年三月十日の東京大空襲で寺は全焼して

墓籍簿、過去帳も焼失。倒壊した墓地は整地され、その際に無縁墓は処理をされたものと思われる。当時の住職は平成十年に亡くなられており詳細は不明。

しかし、中尾友香梨先生の調査研究により、「系図」『徳永雨卿巻物』『遺稿集』等から、雨卿の出自や交友関係が明らかになり、郷校設立直後の先賢たちの群像も見えてきました。（服部）

【参考文献】

- 『舊多久邑人物小誌』（舊多久邑史談會、一九三二年）
- 『多久諸家系図』徳永家系図（多久市郷土資料館蔵）
- 『水江臣記』徳永八良左衛門由緒（秀村選三編集、多久古文書村、文献出版、一九八六年）
- 『櫻鳴館遺稿・卷之八』紀徳民著（国立国会図書館デジタルアーカイブ）
- 『佐賀県近世史料・第一編第六卷』（佐賀県立図書館、一九九八年）
- 『歴史に埋もれた名医・徳永雨卿』中尾友香梨（佐賀大学地域学歴史文化研究センター、二〇一一年）
- 『佐賀学』江戸中期の名医・徳永雨卿（中尾友香梨、（花乱社、二〇一一年）
- 『平成三十年度 佐賀大学公開講座 歴史に埋もれた佐賀「賢」人を探せ』（佐賀大学准教授中尾友香梨先生講演資料、二〇一八年）



▲増林寺（東京都東区深川）

来訪・来信・雑録

- 10月2日 はじめて学ぶ古文書⑤ (多入古文書の村 村民 片倉日龍雄)
- 10月6日 中国古典の扉⑤ (公益財団法人孔子の里理事 武田耕一)
- 10月20日 「鶴山塾」孔子をみる(描かれた聖人) (佐賀県立博物館・美術館 副館長 福井尚寿)
- 10月24日 聖廟周辺清掃 (九電工・さわやかコミュニティ旬間)
- 10月28日 多入聖廟秋季祝祭 第二回多入百景写真コンテスト表彰式
- 11月6日 はじめて学ぶ古文書⑥ (片倉日龍雄)
- 11月10日 中国古典の扉⑥ (武田耕一)
- 11月17日 「鶴山塾」肥前国多入邑八景詩を繙く (福岡県漢詩連盟会長・九州国際大学客員教授 三浦尚司)
- 11月23日 論語カルタ大会 (東京岸舎中央校において)
- 11月24日 「水江事略をよむ③」 (公益財団法人孔子の里常務理事 服部政昭)
- 12月4日 はじめて学ぶ古文書⑦ (片倉日龍雄)
- 12月8日 中国古典の扉⑦ (武田耕一)
- 12月15日 放送大学佐賀学習センター 出前講座「佐賀藩弘道館の教育方針をめぐって」草場佩川と若者たち (佐賀大学地域学歴史研究セ

- 12月19日 ンター講師 三ツ松誠
- 12月26日 東京岸舎防火訓練 生徒会交流会
- 1月4日 新年の集い賀詞交換会(多入温泉タクアにて)
- 1月5日 中国古典の扉⑧ (武田耕一)
- 1月7日 聖廟の森に楷樹苗木五本植樹
- 1月8日 「鶴山塾」草場佩川の書をよむ(書はいかにあるべきか) (佐賀県立佐賀城本丸歴史館 副館長 古川英文)
- 1月26日 「水江事略をよむ④」(服部政昭)
- 1月29日 聖廟の森に楷樹苗木七本植樹
- 2月2日 中国古典の扉⑨ (武田耕一)
- 2月5日 はじめて学ぶ古文書⑧ (片倉日龍雄)
- 2月16日 「鶴山塾」美しい仕事(多入古文書の村 元散事・細川章さん)
- 3月2日 (有田町歴史民俗資料館館長 尾崎葉子)
- 3月5日 中国古典の扉⑩ (武田耕一)
- 3月6日 はじめて学ぶ古文書⑨ (片倉日龍雄)
- 3月16日 公益財団法人孔子の里理事会 (公益財団法人鶴山塾前多入氏と紀伊国の謎)
- 3月20日 公益財団法人鶴山塾報効会役員 大園隆二郎
- 3月23日 「水江事略をよむ⑤」(服部政昭)

● 聖廟の森に棲む動物たち ● ルリビタキ

多入市では冬鳥である。秋の半ばのころには飛来する。数もそんなに少なくない。ところがその居所を目で確かめるとなると、簡単ではない。かれらが好む場所は薄暗い藪の中だからだ。そのやぶの中で鳴く地鳴きは探すがかりになる。ヒツ、ヒツというジョウビタキに似た声で、近づくと声が変わる。枯れ枝や石の上などに好んで止まるからこれもひとつの目安である。

オスの体の上面が明るい青色。下面は汚白色。脇が橙黄色。メス



▲ルリビタキ

は上面がオリブ褐色で分かりにくい。九州での繁殖記録はあるが佐賀県では記録がない。この青い鳥にせひ会ってほしい。(日本野鳥の会 福田 司)

編集後記

近世多入氏(水江龍造寺氏)の御屋形跡に多入市立病院が建っている。御屋形から氏神社の若宮八幡宮への参道(八幡小路)を挟んで、東の原と西の原の城下町が形成されたのは、四百五十年前。元亀元年(一五七〇)、九月十五日、龍造寺長信公が士卒五百餘人を率いて多入梶峯城に入城された時に始まる。

病窓から東の方角に下鶴山(鶴山)、その手前に椎原山(昌平山)を眺めることができる。昌平山の西裾には聖廟が建っているが、ここから望むことはできない。

聖廟の森の倒木処理作業中に崖より落ちて右踵骨折。ベッド上での編集は想像以上に不自由だ。(服)

(福岡県嘉麻市 園田 晃)

去る十二月八日、土曜日、同僚の先生たち(六名)と研修旅行で多入市を訪問しました。

その時、ボランティアのあなた達から「多入聖廟」に関する懇切丁寧なご案内と説明を聞かせていただきました。私たちにあって、とても心温かなおもてなしをして頂いたことで、思い出に残る旅行になりました。

あなた達と別れた後も、車の中で「また、家族を連れて来てみたい」「ボランティアの子どもたち、すごかったねえ!」と、こんな会話が飛び交ったことでした。

何より、当日私たちに「多入のすばらしさ」「多入聖廟の成り立ちや歴史的意義」「論語を知りつくしたあなた達の考え方・在り方」、そしてあなた達の「一生懸命さ」「プレゼンテーション能力」「訪れた私たちへの心配り」には深く感動しました。毎日あなた達と同じく

らいの子どもたちに勉強を教えている私たちにとって、たいへん大きな刺激を与えてくれました。

私共の市も「少子高齢化」「人口減少」が一層進む中において、掲げる施策の一つが教育です。「故郷を愛し、故郷を誇りに思う人材を育てること」にあると思っております。

「孔子」「多入聖廟」という他の地域にない「財産」を教材化し、真に地域に誇りを持つ教育を展開しながら、子どもたちに道徳的な心情や実践意欲を育む多入市の取組には見事としか言いようがありません。

最後になりましたが、ジュニアガイドの皆さまのますますの頑張り、ますますの幸せを心からお祈りしています。